

第 I 部 2015年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第1章 2015年度京都大学構内遺跡調査の概要

第2章 京都大学病院構内 A I 15区の発掘調査

第3章 京都大学吉田南構内 A P 23区の発掘調査

第 1 章 2015年度京都大学構内遺跡調査の概要

吉川真司 千葉 豊 伊藤淳史

1 調査の経過

京都大学文化財総合研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物の新営やそのほかの掘削工事に際し、予定地の埋蔵文化財調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果により、発掘・試掘・立合にわけて実施している。2015年度には、以下のように発掘調査2件、立合調査10件、試掘調査1件、資料整理2件を実施した（括弧内は図版1および表5の地点番号）。

発掘調査	熊野職員宿舍改築（熊野構内A A18区）	（整理中，図版1－435）
	総合高度先端医療病棟（Ⅱ期）新営（病院東構内A H18区）	（発掘中，図版1－436）
立合調査	iPS細胞研究所第3研究棟新営（病院西構内A G14区）	（第1章，図版1－437）
	生活習慣病予防研究センター新築（病院西構内A G11区）	（第1章，図版1－438）
	汚水ポンプアップ排水管（病院西構内A G11区）	（第1章，図版1－439）
	北部構内グラウンド整備（北部構内B J37区）	（第1章，図版1－440）
	北部構内案内板新設（北部構内B K30区）	（第1章，図版1－441）
	吉田南構内案内板新設（吉田南構内A Q24区）	（第1章，図版1－442）
	ベンチャービジネスラボラトリー改修（本部構内A V29区）	（第1章，図版1－443）
	基幹・環境整備（北病棟等受変電設備改修）（病院西構内A G15区）	（第1章，図版1－444）
	iPS細胞研究所第3研究棟新営設備（病院西構内A H14区）	（第1章，図版1－445）
	吉田食堂改修（吉田南構内A M22区）	（第1章，図版1－446）
試掘調査	瀬戸臨海実験所合併処理浄化槽工事（和歌山県瀬戸遺跡）	（第1章，表5－447）
資料整理	医薬総合研究棟新営（病院西構内A I15区）	（第2章，図版1－427）
	国際人材総合教育棟新営（吉田南構内A P23区）	（第3章，図版1－428）

2 調査の成果

以上のうち、2015年度に整理を終えたものについて、成果を略述する。なお、病院西構内A I15区、吉田南構内A P23区の発掘調査については、それぞれ第2・3章で成果を詳述しているので参照されたい。また、北部構内B J37区の立合調査についても、後述するように重要な知見が得られていることから、次節において詳述している。

病院構内A I15区 病院西構内の北半に位置する調査地点は、薬学部構内としては東南隅にあたり、同構内でははじめての発掘調査となった。中世以前にさかのぼる遺構は、

末期とみられる溝群の検出にとどまり、この一帯がおもに近世以降に開発されていった空間であることが確認された。今回の調査では、そうした近世以降の土地利用に関する情報が豊富に得られている。具体的には、調査区を南北方向にはしる石垣や、井戸、溝、土坑などであり、おもには耕作や土地境界にかかわる遺構群と考えられる。京近郊の農地の具体的な姿を復元していく上で、有意義な資料となろう。

吉田南構内 A P 23区 これまで複数の調査が実施されてきた吉田南構内の西南域一帯に位置しており、今回も近世以前の各時代の遺構・遺物が確認されている。とくに、南側に隣接する220地点で良好に検出されていた弥生時代前期水田遺構の北縁部の様相が、周辺の微地形とあわせて把握できた点は、特筆すべき成果であり、列島における水稻農耕導入期の実態を示す貴重な資料となろう。歴史時代以降では、中世期の南北・東西の溝群が多数検出されており、調査地が土地区画上の要地であったことがうかがわれた。とくにL字状の鈍角に屈曲するようなコーナー部分の存在は、囲郭的な施設の存在を示唆するものとして興味深い。今後周辺一帯の調査成果とあわせて検証が求められよう。

立合調査 本年度も吉田キャンパスの各所で実施され、多くの地点で遺物包含層のひろがりを確認している。このうち北部構内のグラウンド整備にともなう立合調査(440地点)では、地形環境の復元に重要な情報が得られているので、次節において詳しく報告する。このほか、吉田南構内では吉田寮食堂の改修にともない、建物内の床下部分も含めた立合調査を実施している(446地点)。同地点では、表土直下に古代～中世の遺物包含層が良好に遺存していることが判明し、微高地上に位置していることが推測された。今後の周辺での調査に際して注意を要するといえよう。

和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査 和歌山県白浜町に位置する瀬戸臨海実験所構内は、瀬戸遺跡として知られている。今回、構内東端の職員宿舍4号棟の北側に浄化槽の設置が計画され、既往の調査では情報の不足している範囲であることから、白浜町教育委員会により試掘調査が実施された。結果、顕著な遺構・遺物の確認はみられず、土師質土器の小片が微量出土したにとどまることから、遺跡範囲の東縁境界付近に位置するものと判断され、工事は立合調査で対応している。

その他 岡山県浅口市鴨方町竹林寺天文台遺跡では、国立大学法人京都大学が新たな天文台建設事業を計画し、浅口市教育委員会により発掘調査が実施された。同遺跡は過去の調査において弥生後期と古代の集落存在が明らかとなっていたが、今回も弥生後期と平安時代の遺構・遺物が確認され、標高340mの丘陵上に位置する高地性集落として注目

された。現在浅口市教育委員会により報告書の作成が進められている (<http://www.city.asakuchi.lg.jp/kurashi/bunka-sports/hakkutsu/tikurinji-site2015.html>)。

3 北部グラウンド防球ネット改修にともなう立合調査

北部グラウンドの北側で防球ネットの改修工事、南側で駐輪場の整備工事が実施されたため、立合調査を実施した(図版1-440)。グラウンド南側の地点は、過去に試掘調査をおこなった地点〔岡田ほか1980, 西川ほか1990〕とほぼ重なっており、同様の層位を確認した。グラウンド北側の地点は、過去に層位データの得られていない地点にあたるため、図1に柱状層位図を掲げ解説を加えておきたい。

A地点、B地点、C地点は、ほぼ東西の直線上にそれぞれ約25mの間隔をあけて位置している。現状では、東側がわずかに高い地形を呈している。

A地点とB地点は、類似した堆積状況を示すが、本来、東に高く西に下る地形を平坦に削平しているため、第2層とした灰褐色土はB地点にはみられず、また、この地一帯の基盤となる灰白色砂(第10層)をB地点では地表下2mで確認したが、A地点では地表下2.5mでも確認できず、さらに下がっていることが推定できる。第1層と第10層のあいだに堆積する地層は、第4層から第7層まで土師器細片を包含しており、第7層からは須恵器も出土している。これらは、古代～中世の遺物包含層とみてよい。とくに、A地点のみでみられた褐色土(第6層)は固くしまっており、多量の土師器細片が含まれていた。暗

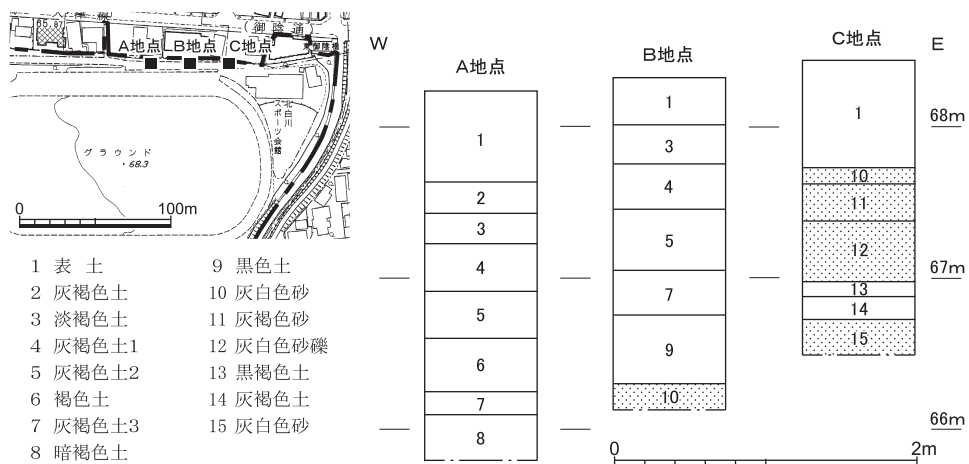


図1 北部グラウンドの立合地点と柱状層位図(縮尺:地図1/5000, 柱状図1/50)

褐色土（第8層）と黒色土（第9層）は遺物を含んでいなかった。

これに対して、C地点では表土直下で、第10層とした灰白色砂がみられ、A地点、B地点で認められた歴史時代の遺物包含層は削平により失われていた。第10層以下は、灰褐色砂（第11層）・灰白色砂礫（第12層）といった水成堆積が続くが、その下層で土壌化した堆積（第13層・第14層）を確認した。遺物が出土していないので、時期を特定することは困難であるが、縄文時代以前にさかのぼる堆積物と予想される。

今回の立合調査では、グラウンド南側で確認されていた、東から西へ急激に下がる地形やグラウンド東辺では遺物包含層が削平されている状況は、北側でも同様な状況であることを追認した。一方、新たな事実として基盤をなすと考えられる砂層中に土壌化層が介在していることが判明した。削平がおこなわれているグラウンド東辺でも、下層に遺跡が存在しないか、留意する必要があるだろう。